

恥

太宰治

菊子さん。恥はじをかいちやつたわよ。ひどい恥をかきました。顔から火が出る、などの形容はなまぬるい。草原をころげ廻つて、わあつと叫びたい、と言つても未だ足りない。サムエル後書にありました。「タマル、灰を其その首こうべに蒙かむり、着たる振袖ふりそでを裂き、手を首こうべにのせて、呼よばわりつつ去さりゆけり」可愛そうな妹タマル。わかい女は、恥はじずかしくてどうにもならなくなつた時には、本当に頭から灰でもかぶつて泣いてみたい気持ちになるわねえ。タマルの気持がわかります。

菊子さん。やつぱり、あなたのおっしやつたとおりだったわ。小説家なんて、人の屑くずよ。いいえ、鬼です。

ひどいんです。私は、大恥かいちゃった。菊子さん。私は今まであなたに秘密にしていたけれど、小説家の戸田さんに、こっそり手紙を出していたのよ。そうしてとうとう一度お目にかかって大恥かいてしまいました。つまらない。

はじめから、ぜんぶお話申しましょう。九月のはじめ、私は戸田さんへ、こんな手紙を差し上げました。たいへん気取って書いたのです。

「ごめん下さい。非常識と知りつつ、お手紙をしたためます。おそらく貴下の小説には、女の読者がひとりも無かった事と存じます。女は、広告のさかんな本ば

かりを読むのです。女には、自分の好みがありません。人が読むから、私も読もうという虚栄みたいなもので読んでいるのです。物知り振やたらっている人を、矢鱈やたらに尊敬いたします。つまらぬ理窟りくつを買いかぶります。貴下は、失礼ながら、理窟をちつとも知らない。学問も無いようです。貴下の小説を私は、去年の夏から読みはじめ、ほとんど全部を読んでしまつたつもりでございます。それで、貴下にお逢までいする迄もなく、貴下の身辺の事情、容貌、風采ふうさい、ことごとくを存じて居ります。貴下に女の読者がひとりも無いのは、確定的の事だと思ひました。貴下は御自分の貧寒の事や、吝嗇りんしょく

の事や、さもしい夫婦喧嘩、下品な御病氣、それから容貌のずいぶん醜い事や、身なりの汚い事、蝟の脚なんかを齧かじつて焼酎しょうちゆうを飲んで、あばれて、地べたに寝る事、借金だらけ、その他たくさん不名誉な、きたならしい事ばかり、少しも飾らずに告白なさいます。あれでは、いけません。女は、本能として、清潔を尊びます。貴下の小説を読んで、ちよつと貴下をお気の毒とは思つても、頭のとつぺんが禿はげて来たとか、齒がぼろぼろに欠けて来たとか書いてあるのを読みますと、やっぱり、余りひどくて、苦笑してしまいます。ごめんなさい。軽蔑したくなるのです。それに、貴下は、

とても口で言えない不潔な場所の女のところへも出掛
けて行くようではありませんか。あれでもう、決定的
です。私でさえ、鼻をつまんで読んだ事があります。
女のひとは、ひとりのこらず、貴下を軽蔑し、ひんしゆく 擧蹙す
るのも当然です。私は、貴下の小説をお友だちに隠れ
て読んでいました。私が貴下のものを読んでいるとい
う事が、もしお友達にわかったら、私は嘲笑せられ、
人格を疑われ、絶交される事でしょう。どうか、貴下
に於いても、ちよつと反省をして下さい。私は、貴下
の無学あるいは文章の拙劣、あるいは人格の卑しき、
思慮の不足、頭の悪さ等、無数の欠点をみとめながら

も、底に一すじの哀愁感のあるのを見つけたのです。私は、あの哀愁感を惜しみます。他の女の人には、わかりません。女のひとは、前にも申しましたように虚栄ばかりで読むのですから、やたらに上品ぶった避暑地の恋や、あるいは思想的な小説などを好みますが、私は、そればかりでなく、貴下の小説の底にある一種の哀愁感というものも尊いのだと信じました。どうか、貴下は、御自身の容貌の醜さや、過去の汚行や、または文章の悪さ等に絶望なさらず、貴下独特の哀愁感を大事になさって、同時に健康に留意し、哲学や語学をいま少し勉強なさって、もっと思想を深めて下さい。

貴下の哀愁感が、もし将来に於いて哲学的に整理でき
たならば、貴下の小説も今日の如く嘲笑せられず、貴
下の人格も完成される事と存じます。その完成の日に
は、私も覆面ふくめんをとって私の住所姓名を明らかにして、
貴下とお逢いしたいと思いますが、ただ今は、はるか
に声援をお送りするだけで止そうと思えます。お断り
して置きますが、これはファン・レターではございま
せぬ。奥様なぞにお見せして、おれにも女のファンが
出来たなんて下品にふぎけ合うのは、やめていただき
ます。私はプライドを持っています。」

菊子さん。だいたい、こんな手紙を書いたのよ。貴

下、貴下とお呼びするのは、何だか具合が悪かったけど「あなた」なんて呼ぶには、戸田さんと私とでは、としが違いすぎて、それに、なんだか親し過ぎて、いやだわ。戸田さんが年甲斐も無く自惚うぬぼれて、へんな気を起したら困るとも思ったの。「先生」とお呼びするほど尊敬もしてないし、それに戸田さんには何も学問がないんだから「先生」と呼ぶのは、とても不自然だと思ったの。だから貴下とお呼びする事にしたんだけど、「貴下」も、やっぱり少しへんね。でも私は、この手紙を投函しても、良心の呵責かしゃくは無かった。よい事をしたと思った。お気の毒な人に、わずかでも力をかし

てあげるのは、気持のよいものです。けれども私は此
の手紙には、住所も名前も書かなかつた。だつて、こ
わいもの。汚い身なりで酔つて私のお家へ訪ねて来た
ら、ママは、どんなに驚くでしょう。お金を貸せ、な
んて脅迫するかも知れないし、とにかく癖の悪いおか
ただから、どんなこわい事をなさるか分からない。私
は永遠に覆面の女性でいたかつた。けれども、菊子さ
ん、だめだつた。とつても、ひどい事になりました。
それから、ひとつき経たぬうちに、私は、もう一度戸
田さんへ、どうしても手紙を書かなければならぬ事情
が起りました。しかも今度は、住所も名前も、はつき

り知らせて。

菊子さん、私は可哀想な子だわ。その時の私の手紙の内容をお知らせすると、事情もだいたいおわかりの筈ですから、次に御紹介いたしますが、笑わないで下さい。

「戸田様。私は、おどろきました。どうして私の正体を捜し出す事が出来たのでしょうか。そうです、本当に、私の名前は和子です。そうして教授の娘で、二十三歳です。あざやかに素破すっぱぬ抜かれてしまいました。今月の『文学世界』の新作を拝見して、私は呆然としてしまいました。本当に、本当に、小説家というものは油断の

ならぬものだと思います。どうして、お知りになつたのでしょうか。しかも、私の氣持まで、すっかり見抜いて、『みだらな空想をするようにさえなりました。』などと辛辣しんちつな一矢を放っているあたり、たしかに貴下の驚異的な進歩だと思いました。私のあの覆面の手紙が、ただちに貴下の製作慾をかき起したという事は、私にとつてもよろこばしい事でした。女性の一支持が、作家をかく迄も、いちじるしく奮起させるとは、思いも及ばなかつた事でした。人の話に依よりますと、ユーゴー、バルザックほどの大家でも、すべて女性の保護と慰藉いしやのおかげで、数多い傑作をものしたのだそうで

す。私も貴下を、及ばずながらお助けする事に覚悟を
きめました。どうか、しっかりとやって下さい。時々お
手紙を差し上げます。貴下の此の度の小説に於いて、
わずかながら女性心理の解剖を行っているのはたしか
に一進歩にて、ところどころ、あざやかであつて感心
も致しましたが、まだまだ到らないところもあるので
す。私は若い女性ですから、これからいろいろ女性の
心を教えてあげます。貴下は、将来有望の士だと思い
ます。だんだん作品も、よくなつて行くように思いま
す。どうか、もつと御本を読んで哲學的教養も身につ
けるようにして下さい。教養が不足だと、どうしても

大小説家にはなれません。お苦しい事が起つたら、遠慮なくお手紙を下さい。もう見破られましたから、覆面はやめましょう。私の住所と名前は表記のとおりです。偽名ではごさいませんから、御安心下さいませ。貴下が、他日、貴下の人格を完成なさつたあかつき暁には、かならずお逢いしたいと思いますが、それまでは、文通のみにて、かんにんして下さいませ。本当に、このたびは、おどろきました。ちゃんと私の名前まで、お知りになつて居るのですもの。きつと、貴下は、あの私の手紙に興奮して大騒ぎしてお友達みんなに見せて、そうして手紙の消印などを手がかりに、新聞社のお友

達あたりにたのんで、とうとう、私の名前を突きとめたというようなところだろうと思つていますが、違いますか？ 男のかたは、女からの手紙だと直ぐ大騒ぎをするんだから、いやだわ。どうして私の名前や、それから二十三歳だという事まで知ったか、手紙でお知らせ下さい。末永く文通いたしましょう。この次からは、もっと優しい手紙を差し上げましょうね。御自重下さい。」

菊子さん、私はいま此の手紙を書き写しながら何度も何度も泣きべそをかきました。全身に油汗がにじみ出る感じ。お察し下さい。私、間違っていたのよ。私

の事なんか書いたんじや無かったのよ。てんで問題に
されていなかっただのよ。ああ恥ずかしい、恥ずかしい。
菊子さん、同情してね。おしまいまでお話するわ。

戸田さんが今月の『文学世界』に発表した『七草』
という短篇小説、お読みになりましたか。二十三の娘
が、あんまり恋を恐れ、恍惚こうこうを憎んで、とうとうお金
持ちの六十の爺さんと結婚してしまって、それでも
やっぱり、いやになり、自殺するという筋の小説。す
こし露骨で暗いけれど、戸田さんの持味は出ていまし
た。私はその小説を読んで、てつきり私をモデルにし
て書いたのだと思ひ込んでしまったの。なぜだか、二、

三行読んだとたんにそう思い込んで、さつと蒼あおざめま
した。だって、その女の子の名前は私と同じ、和子じゃ
ないの。としも同じ、二十三じゃないの。父が大学の
先生をしているところまで、そっくりじゃないの。あ
とは私の身の上と、てんで違うけれど、でも、之これは私
の手紙からヒントを得て創作したのにちがいないと、
なぜだかそう思い込んでしまったのよ。それが大恥の
もとでした。

四、五日して戸田さんから葉書をいただきましたが、
それにはこう書かれて居りました。

「拝復。お手紙をいただきました。御支持をありがた

く存じます。また、この前のお手紙も、たしかに拝誦いたしました。私は今日まで人のお手紙を家の者に見せて笑うなどという失礼な事は一度も致しませんでした。また友達に見せて騒いだ事もございません。その点は、御放念下さい。なおまた、私の人格が完成してから逢って下さるのだそうですが、いったい人間は、自分で自分を完成できるものでしょうか。不一。」

やっぱり小説家というものは、うまい事を言うものだと思いました。一本やられたと、くやくしく思いました。私は一日ぼんやりして、翌^{あく}る朝、急に戸田さんに逢いたくなったのです。逢ってあげなければいけない。

あの人は、いまきつとお苦しいのだ。私がいま逢つてあげなければ、あの人は墮落してしまうかも知れない。あの人は私の行くのを待っているのだ。お逢い致しましょう。私は早速、身仕度をはじめました。菊子さん、長屋の貧乏作家を訪問するのに、ぜいたくな身なりで行けると思つて？ とても出来ない。或る婦人団体の幹事さんたちが狐きつねの襟卷えりまきをして、貧民窟の視察に行つて問題を起した事があつたでしょう？ 気を付けなければいけません。小説に依ると戸田さんは、着る着物さえ無くて綿のみ出たドテラ一枚きりなのです。そうして家の畳は破れて、新聞紙を部屋一ぱいに敷き詰

めてその上に坐って居られるのです。そんなにお困りの家へ、私がこないだ新調したピンクのドレスなど着て行ったら、いたずらに戸田さんの御家族を淋さびしながらせ、恐縮させるばかりで失礼な事だと思ったのです。私は女学校時代のつぎはぎだらけのスカートに、それからやはり昔スキーの時に着た黄色いジャケット。此のジャケットは、もうすっかり小さくなつて、両腕ひじが肘ひじかく迄によつきり出るのです。袖口そでぐちはほころびて、糸が垂れさがつて、まず申し分のない代物しろものなのです。戸田さんは毎年、秋になると脚かっけ気が起つて苦しむという事も小説で知っていましたので、私のベッドの毛布

を一枚、風呂敷に包んで持って行く事に致しました。毛布で脚をくるんで仕事をなさるように忠告したかったです。私は、ママにかくれて裏口から、こっそり出ました。菊子さんもご存じでしょうが、私の前歯が一枚だけ義歯で取りはずし出来るので、私は電車の中でそれをそっと取りはずして、わざと醜い顔に作りました。戸田さんは、たしか歯がぼろぼろに欠けている筈ですから、戸田さんに恥をかかせないように、安心させるように、私も歯の悪いところを見せてあげるつもりだったのです。髪もくしゃくしゃに乱して、ずいぶん醜いままずしい女になりました。弱い無智な貧乏人

を慰めるのには、たいへんこまかい心使いがなければいけないものです。

戸田さんの家は郊外です。省線電車から降りて、交番で聞いて、わりに簡単に戸田さんの家を見つけました。菊子さん、戸田さんのお家は、長屋ではありませんでした。小さいけれども、清潔な感じの、ちゃんとした一戸構えの家でした。お庭も綺麗に手入れされて、秋の薔薇ばらが咲きそろっていました。すべて意外の事ばかりでした。玄関をあけると、下駄箱の上に菊の花を活けた水盤が置かれていました。落ちついて、とても上品な奥様が出て来られて、私にお辞儀を致しました。

私は家を間違ったのではないかと思いました。

「あの、小説を書いて居られる戸田さんは、こちらさまでございますか。」と、恐る恐るたずねてみました。

「はあ。」と優しく答える奥様の笑顔は、私にはまぶしかった。

「先生は、」思わず先生という言葉が出ました。「先生は、おいででしょうか。」

私は先生の書齋にとおされました。まじめな顔の男が、きちんと机の前に坐っていました。ドテラでは、ありませんでした。なんとという布地か、私にはわかりませんが、濃い青色の厚い布地のあわせ袷あわせに、黒地に白

い縞が一本はいつている角帯をしめていました。書齋は、お茶室の感じがしました。床の間には、漢詩の軸。私には、一字も読めませんでした。竹の籠には、蔦つたが美しく活けられていました。机の傍には、とてもたくさんのお本がうず高く積まれていました。

まるで違うのです。歯も欠けていません。頭も禿はげていません。きりつとした顔をしていました。不潔な感じは、どこにもありません。この人が焼酎を飲んで地べたに寝るのかと不思議でなりませんでした。

「小説の感じと、お逢いした感じとまるでちがいます。」私は気を取り直して言いました。

「そうですか。」軽く答えました。あまり私に関心を持たない様子です。

「どうして私の事をご存じになったのでしょうか。それを伺いにまいりましたの。」私は、そんな事を言つて、体裁を取りつくろつてみました。

「なんですか？」ちつとも反応がありません。

「私が名前も住所もかくしていたのに、先生は、見破つたじやありませんか。先日お手紙を差し上げて、その事を第一におたずねした筈ですけど。」

「僕はあなたの事なんか知っていませんよ。へんですね。」澄んだ眼で私の顔を、まっすぐに見て薄く笑いま

した。

「まあ！」私は狼狽ろうばいしはじめました。「だって、そんなら、私のあの手紙の意味が、まるでわからなかったでしょうに、それを、黙っているなんて、ひどいわ。私を馬鹿だと思ったでしょうね。」

私は泣きたくなりました。私は何というひどい都合点をしていたのでしよう。滅つ茶、滅茶。菊子さん。顔から火が出る、なんて形容はなまぬるい。草原をころげ廻つて、わあつと叫びたい、と言つても未だ足りない。

「それでは、あの手紙を返して下さい。恥ずかしくて

いけません。返して下さい。」

戸田さんは、まじめな顔をしてうなずきました。怒ったのかも知れません。ひどい奴だ、と呆あきれたのでしよう。

「搜してみましよう。毎日の手紙をいちいち保存して置くわけにもいきませんから、もう、なくなっているかも知れませんが、あとで、家の者に捜させてみます。もし、見つかったら、お送りしましょう。二通でしたか？」

「二通です。」みじめな気持。

「何だか、僕の小説が、あなたの身のの上に似ていたそ

うですが、僕は小説には絶対にモデルを使いません。全部フィクションです。だいいち、あなたの最初のお手紙なんか。」ふっと口を噤つぶんで、うつむきました。

「失礼いたしました。」私は齒の欠けた、見すばらしい乞食娘だ。小さすぎるジャケットの袖口は、ほころびている。紺こんのスカートは、つぎはぎだらけだ。私は頭のとっぺんから足の爪先まで、軽蔑されている。小説家は悪魔だ！ 嘘つきだ！ 貧乏でもないのに極貧の振りをしている。立派な顔をしている癖に、醜貌だなんて言つて同情を集めている。うんと勉強している癖に、無学だなんて言つてとぼけている。奥様を愛している

癖に、毎日、夫婦喧嘩だと吹聴している。くるしくもないのに、つらいような身振りをしてみせる。私は、だまされた。だまってお辞儀して、立ち上り、

「御病気は、いかがですか？ 脚気だとか。」

「僕は健康です。」

私は此の人のために毛布を持って来たのだ。また、持って帰ろう。菊子さん、あまりの恥ずかしさに、私は毛布の包みを抱いて帰る途々、泣いたわよ。毛布の包みに顔を押しつけて泣いたわよ。自動車の運転手に、馬鹿野郎！ 気をつけて歩けって怒鳴られた。

二、三日経ってから、私のあの二通の手紙が大きい

封筒にいれられて書留郵便でとどけられました。私には、まだ、かすかに一縷いちろうの望みがあつたのでした。もしかしたら、私の恥を救ってくれるような佳よい言葉を、先生から書き送られて来るのではあるまいか。此の大きい封筒には、私の二通の手紙の他に、先生の優しい慰めの手紙もはいつているのではあるまいか。私は封筒を抱きしめて、それから祈つて、それから開封したのですが、からっぽ。私の二通の手紙の他には、何もはいつていませんでした。もしや、私の手紙のレターペーパーの裏にでも、いたずら書きのようにして、何か感想でもお書きになつていないかしらと、いちまい、

いちまい、私は私の手紙のレターペーパーの裏も表も、
ていねいに調べてみましたが、何も書いていかなかった。
この恥ずかしさ。おわかりでしょうか。頭から灰でも
かぶりたい。私は十年も、としをとりました。小説家
なんて、つまらない。人の屑うそだわ。嘘うそばかり書いて
いる。ちつともロマンチックではないんだもの。普通
の家庭に落ち附いて、そうして薄汚い身なりの、前歯
の欠けた娘を、冷く軽蔑して見送りもせず、永遠に他
人の顔をして澄ましていようというんだから、すさま
じいや。あんなの、インチキというんじゃないかしら。

底本…「太宰治全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年12月1日第1刷発行

底本の親本…「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6
月

入力…柴田卓治

校正…もりみつじゅんじ

2000年3月27日公開

2005年10月27日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。